

## 内村鑑三とその時代 (2) — 正統的神学と自由主義神学の論争 —

古 賀 敬 太\*

## Kanzo Uchimura and His Time (2) — Dispute between orthodox and liberal theology —

Keita Koga\*

### Abstract

This article deals with the dispute of Christian leaders between orthodox and liberal theology. Liberal theology was introduced into Japan between 1880 and 1890 and the members of Kumamoto Band such Michitomo Kanamori (1857-1945), Tokio Yokoi (1857-1927), and especially Danjyou Ebina (1860-1946) shifted to the new theology, while Kanzo Uchimura (1861-1930) and Masahisa Uemura (1858-1925) defended orthodox theology. The main issues of the two different theologies were the deity of Jesus Christ, the Trinity, the doctrine of atonement, biblical inerrancy, etc.

The heated controversy between orthodox and liberal theology culminated in the theological confrontation between Masahisa Uemura and Danjyo Ebina, which continued from 1901 to 1902 for almost one year.

Although Kanzo Uchimura and Masahisa Uemura agreed with orthodox theology and refuted liberal theology, they could not establish common ground because of differences in church principle.

### キーワード

自由主義神学、新神学、三位一体、贖罪論、植村正久と海老名弾正の神学論争

## I 正統的神学と自由主義神学

本稿は、新神学ないし自由主義神学に傾斜していった熊本バンドの金森通倫、横井時雄、そして海老名弾正と、自由主義神学と戦い、正統的信仰を守り続けた植村正久と内村鑑三の立場とを比較対照し、1890年から1910年頃までの日本のプロテスタント教会の動向に

---

\* こが けいた：大阪国際大学名誉教授〈2021. 9. 16 受理〉

ついて追跡することとする。

## 1 新神学の日本への影響

1877年に改革派と長老教会が合同して日本基督一致教会が成立し、1886年には、日本組合教会が設立された。その後日本基督一致教会と日本組合教会の合同が試みられたが、1890年に破綻するに至った。これは、会衆主義に固執する新島襄の反対が主要な理由である。しかし、より本質的な原因は、合同するに際しての教義的・神学的共通項が不足していたのではないと思われる。事実この頃、特に組合派の牧師たちによって新神学、自由主義神学が導入され、キリスト教会内部で神学論争が展開されることになる。

日本では1885年ドイツ普及福音新教伝道会に属するスイス人宣教師ウィルフリード・スピナー (Wilfried Spinner, 1854-1918) が来日し、チュービンゲンの高等批評 (聖書の歴史的・批判的研究) を紹介し、原罪、キリストの神性、奇跡、復活などを否定した。彼の影響を受けたのが一高教授の丸山通一 (1869-1938) や三並良 (1865-1940) である。スピナーは、「新教神学校」という神学教育機関を設け、機関紙『真理』を刊行し、新神学の普及に努めた。

また1888年には、アメリカのユニテリアン協会の宣教師でハーバード大学で学んだアーサー・ナップ (Arthur Knapp, 1841-1921) が来て正統派の信仰を批判した。ユニテリアンとは、キリストの神性を批判し、三位一体を認めず、キリストによる贖罪を否定する集団である。ユニテリアンの神学者たちは、機関誌『ゆにてりあん』を発行し、京橋に「東京自由神学校」を設立し、ユニテリアンの教義を宣伝した。

また、直接日本に来日した宣教師からだけではなく、19世紀のドイツの自由主義神学者の書物が、組合教会の金森通倫、横井時雄、海老名弾正に多大な影響を及ぼした。

政池仁は、『内村鑑三伝』において、横井時雄と金森道倫について次のように述べている。

「明治二十四年 (1891年) には、金森通倫が『日本現今の基督教並びに将来の基督教』を著して『キリストは全能の神にあらず、人とみてこそ、その生涯の言行を満足に説明し得ると信ず』と説いた。また横井時雄も『六合雑誌』に新神学を主張した。明治二十七年 (1894年) に出した『我国のキリスト教諸問題』には『旧神学破壊せざるべからず、新神学建設せざるべからず』と説いている。」<sup>1)</sup>

内村もこの論争に巻き込まれざるをえなかった。否、キリスト教界自体が、揺り動かされたのである。以下、自由主義神学を主張した金森通倫と横井時雄の見解を紹介し、それに対する内村鑑三の批判を見ておくことにする。

雨宮栄一は、明治期における新神学の導入について、以下の様に述べている。

「新神学の導入によって教会は大いに揺さぶられた。新神学を受容した金森通倫は、1891年『日本現今の基督教並びに日本の信仰』を記し、いわゆる正統派信仰を攻撃し、また自らもキリスト教信仰から離れ、実業界へ転じた。この書物が一週間で初版を売り切ったということも、当時のキリスト教徒が『新神学』問題に大に関心を払った証左であろう。横井時雄も同じ道を歩んだ。彼らを信仰上の指導者として仰いでいた人

の動揺も目に浮かぶ。少なからざる人々が信仰から離れた。それもそのはずである。この金森通倫の書物は、内容的には、第一に聖書の歴史的批判的研究の受容であり、それに連動して第二は、イエスの神性への懐疑が表明されている。』<sup>2)</sup>

## 2 金森通倫の新神学

金森通倫は、1879年同志社大学を卒業し、岡山伝道を志し、岡山教会を設立する。1886年に同志社神学部教授に就任し、その後、社長代理や校長として同志社大学設立のために奔走した。金森の代わりに岡山教会の牧師に就任したのが、安部磯雄（1865-1949）である。金森が同志社校長を辞し、東京の番町教会の牧師に招聘されたのは、1890年7月であった。この年の1月に新島襄が死去し、翌年の1月に内村鑑三の不敬事件が起きている。金森が新神学を主張し、組合派の番町教会を去るのが1891年7月である。彼の著書『日本現在及将来の基督教』（1891年6月）の中に彼の主張が展開されている。したがって、不敬事件の頃の金森は、すでに新神学、自由主義神学を信奉していたといえよう。彼が新神学の典拠としたものはオットー・プフライデラー（Otto Pfeiderer, 1839-1908）であった。プフライデラーはチュービンゲン大学でF・C・パウアー（Ferdinand Christian Bauer, 1792-1860）について学び、ベルリン大学で教義学や新約学を講じていた神学者で、「宗教史学」の先駆者であった。後に述べる海老名弾正もプフライデラーの感化を受けている。プフライデラーは、新神学を日本に導入しようとした普及福音教会のスピンナーの友人でもあった。金森は、1892年7月に『自由神学』と題してプフライデラーの邦訳を出版している。金森が新神学を最も大胆に説いたのは、1891年6月に出した『日本現今の基督教並に将来の基督教』であった。

本書は、第一章「キリスト教の大勢」、第二章「バイブル」、第三章「キリスト神性説の批評」、第四章「キリストの宗教心」、第五章「誰をクリスチャンと言う」、第六章「贖罪説の批評」から構成されている。彼は、正統的なキリスト教の教義が、旧態依然としていて、キリスト教普及のつまずきとなっていると主張する。彼は、バイブルを「唯一無二完全無謬な神の言葉」であるとする説を批判し、聖書に誤謬が含まれていると指摘する。聖書は神の靈感の書ではなく、人間が記録し、編纂した文書に他ならない。また彼は、イエス・キリストが人ではあるが、「完全無欠、絶対無限」という意味での神ではないと主張する。イエスは、キリスト教の創始者であり、神と心が一つとなる最高の宗教心を持った人物であるにすぎず、イエスの奇跡も弟子たちの妄想の産物にすぎない。金森は、奇跡やイエス・キリストの神性、そして三位一体を否定することによって、できるだけ理性で理解できるようなキリスト教の再構築を試みるのである。そこには、啓蒙主義や合理主義の影響がみられる。金森はキリスト論において、イエスは私たち人間と異なった存在ではなく、神と心が一つとされれば、人間もイエスのようになりうると主張する。

「救いは、即ち神人の合同、天地の融和なり、もし、之を会得し、ここに至るを神となるといわば、御人は神となるという。』<sup>3)</sup>

また金森はイエス・キリストの十字架の贖いを否定する。キリストの十字架は決して人

間の贖罪のための犠牲ではない。彼は、人が神に帰り、神と一つになるためには人が悔い改めて、方向転換するだけで、神に赦されるのであり、贖罪や仲保者の必要は全くないと主張する。金森の新神学では、人間の原罪、神の裁き、地獄、基督の十字架と復活による救いは完全に除外されている。救いとは、神と心が一つにされることだけである。

こうした極端な自由主義神学は、彼が属していた組合派の番町教会でも受け入れられず、彼は事実上追放される形で牧師を辞めざるをえなかった。金森の自伝である『回顧録』によれば、金森の自己認識においては、金森の新神学は、別に新しいものではなく、すでに熊本洋学校で学んだジェーンズ（1883-1909）が奉じていたものである。事実ジェーンズの教えを受けた熊本バンドの青年は、同志社でジェローム・デイヴィス（1838-1910）のようなアメリカン・ボードの宣教師たちの正統的神学とことごとく対立したのである。

ちなみに、金森は、1912年の奥さんの死を契機として、正統的な信仰に復帰している。金森は、岡山での彼の伝道で回心し、洗礼を受け、孤児院を開設した石井十次（1865-1914）の深刻な病氣を知り、1913年11月6日に石井に次のような書簡を送っている。金森は奥さんの死という苦難を経験して、十字架信仰に立ち返ったのである。

「石井君、僕も多年の間、暗き死のかげの谷を通りました。実におそろべき道をふんで居りました。しかしその死のかげを通る間も、神は少しも愛の御手をゆるめ給わず、昨年は僕の目の前より最愛の者を取り去り給うて、僕をして長き間の眠りよりさめしめ給うたのである。さめて誠に驚いた。自分の身がいかなる危き位置に立って居りしかを。誠に神はほむべきかな。神はたしかに昨年の不幸をもって僕を死のかげより救い給うた。今は、全く生まれ変わって、嬰兒の如くなりて、神に仕える次第であります。……石井君よ。僕はもうすべての世の中の議論や理屈をすてて単純な最初の信仰に立ち返りました。神は愛の天父である事、キリストは私のために十字架に死し給うたこと、私は罪人の中の大罪人である事、私はたしかに死後には罪のために地獄に落つべきはずであったこと、今は救われて天国の民たる事、以上の単純なるキリスト教の根本真理を僕は今更のごとくに信ずるようになった。……君もどうぞ最初の単純なる信仰をもち給え。我々を救うものは、キリストの十字架のほかなし。議論はいらぬ。理屈はいらぬ。信ずべきはキリストの十字架、頼るべきはキリストの十字架、望むべきは天国の福である。僕はもう今では此の世に就いては死んだものと心得ている。……お互いに最初の単純なる信仰にかえり、神を愛し、キリストを愛し、天国を望んで進み来るものである。此の手紙は君の上に神の祝福あらんことを。」<sup>4)</sup>

金森は、十字架の贖いを確信することによって、再度伝道者として、海外伝道、日本国内の伝道に全生涯を燃焼するようになる。

### 3 横井時雄の新神学

横井時雄は、同志社卒業後今治伝道を志し、今治教会を設立したが、1886年に海老名弾正の後任として東京の本郷教会の牧師に就任した。また基督教雑誌の『六合雑誌』や『基督教新聞』発行の責任を負うようになる。彼の父は横井小楠（1809-1869）で、母のツセ子は矢島家の五女、四女の久子が、徳富猪一郎（蘇峰）と健次郎（蘆花）の母なので、横井

時雄と徳富兄弟とは、姻戚関係にあった。また時雄の妹のみや子は、海老名弾正に嫁いでいるので、海老名弾正とも姻戚関係にある。また彼は、1881年新島八重の兄山本覚馬の娘みなと結婚している。

横井は当初は金森の新神学に反対していた。不敬事件の時も正統的な信仰を持っていたと思われる。彼は、1891年7月15日『六合雑誌』（127号）に、「金森通倫氏の新学説を評す」を掲載して、金森の著書『日本の現今の基督教並びに将来の基督教』を論評し、特に基督の神性を否定する金森に対し、受肉と復活、基督の罪のない性質を指摘し、基督の神性を示そうと試みている。横井氏は、キリストの受肉の聖書の根拠として、「キリストは、神の御姿であるにもかかわらず、神としてのありかたを捨てられないと考えず、ご自分をむなしくして、しもべの姿をとり、人間と同じようになられました。」（ピリピ人への手紙2：6-7）を引用し、またキリストの復活を示すために、「御子は、肉によればダビデの子孫から生まれ、聖なる霊によれば、死者の中からの復活により、力ある神の子として公に示された方、私たちの主イエス・キリストです。」（ローマ書1：3～4）を引用している。（『六合雑誌』、⑫-2、4）

更に横井は1891年10月15日の『六合雑誌』（130号）に、「我信仰の表白」と題して、自らの信仰の経緯に触れた後に、基督の神性、聖霊、三位一体、罪惡説、来世論、聖書論に言及しつつ、結論として、ユニテリアン、ドイツ教会派、自由派キリスト教を批判して、正統派の教会を支持している。

たしかに、この時点で、横井の議論が、金森の極端な自由主義神学を退けているのは事実である。しかし同時に、微妙に正統派の教義からの逸脱をも示しており、後に内村が批判する所となる。例えば、横井はアダムとエバの罪がその後全人類に遺伝したという原罪説を否定する。

「余は、いわゆる始祖の原罪なるものを信ぜず、すなわち一人の罪故により、神は全人類をとがめ、これを罰せんとし給う云うことを信ぜず、すなわち人心の全然堕落なる説を信ぜず、すなわち人心は、少しも善をなすの力もなく、その思う所、そのなす所、皆悉く罪惡なりと云うの説を信ぜず。けだし、この後の二説は、欧米正統神学中よりも、ほとんど放棄せられんとしつつあり。」（『六合雑誌』、⑬-22）

また贖罪説に関しては、「キリストの十字架とは、全人類を罪惡より救うにたと信ず」と主張し、「キリストとその十字架は、無限の価値を有し」、人間を罪の奴隷から解放すると述べつつも、「神学者のいわゆる贖罪説に至っては、いまだ我が理性を満足する者あるを聞かず」（同書、22-23頁）と述べている。横井が否定する贖罪説とは、刑罰的代償説である。つまり、彼にとってキリストの十字架は、神の愛のあらわれであるが、人間の罪の身代わりとしてキリストが十字架にかけられ、神によって裁かれたことによる罪の赦しではない。彼の言う十字架は、キリストの犠牲の行為が人間の良心を強めて犠牲的な道徳的行為をもたらす「道徳的感化説」か、罪人のための犠牲の死という「犠牲説」に他ならなかった。

横井は、不敬事件の10か月後1891年11月に警醒社から『基督教新論』を出版し、自らの基督教理解を展開した。ここには『基督教新聞』の社説として書かれたものが多く含ま



れている。一見ここでは比較的正統な教義が展開されているように思われるが、「我信仰の表白」と同様に、自由主義神学に至る過度的段階にある。

イエス・キリストの神性については、「吾人は、キリスト・イエスにおいて完全な人性を見るのみならず、また実に神の発現を見るなり」<sup>5)</sup>と、イエス・キリストの人性と神性の双方を認めている。また彼は、キリストの十字架は人間を罪の支配から解放する代価であり、神の愛の現れであると主張する。ただすでに述べたように彼は、刑罰的代償説を否定している。

「もし、キリストの十字架は、神の義心を満足し、神の憤怒を挽回して以って人を救うものなりと云わば、余輩は未だその意を解するを得ずと答えざるを得ざるなり。けれど、論者のいわゆる神の義心は、罪人の罰を要求するものなるべければ、罪人の罰せられてこそ、初めて満足するを得べけれ、一点の罪なきキリストが人に代わって天罪を受けしとて、何で満足するの理あらんや。」<sup>6)</sup>

他方、横井は、キリストのなした奇跡や復活を支持し、キリストの復活は弟子たちの願望にすぎないとする主張を批判し、第一コリント 15 章のパウロの復活の記事を取り上げ、復活が福音の土台であることを論証している。

「世の懷疑論者は、何等なる論鋒を以ってこの確実なる歴史上の事実を説破せんと欲するも、決して説破し能わざるべし。吾人はこの確信の上に信仰の生命を置きて以って今後我邦伝道の大業に当たらざるべからず。」<sup>7)</sup>

このように、1891 年の段階では、横井の「我信仰の表白」にせよ、『基督教新論』にせよ、正統的神学を継承している部分があり、彼が明確に正統的神学から新神学に移行したとはいいがたく、いわば新神学に至る過度的段階にあったといえよう。

横井の論調に明確に変化がでてくるのが、「現世的基督教」の論考である。横井は 1892 年 10 月 5 日の『六合雑誌』(139 号)に、「現世的宗教」と題して寄稿し、基督教の意義は、来世による救済はほんの一部で、現世に「神の国」をもたらしことにあると主張する。彼は、「第二十世紀の基督教は、蓋し社会的、政治的、倫理的、宗教的の基督教にして、キリストと山上垂訓を主眼とし、神の王国をこの世界に実行するものならん」(『六合雑誌』、○139 - 422)と主張する。彼は、来世を拒むものではなく、個人的救いを軽んじるものではないと主張しつつも、「キリストの救は、人の靈魂を天上の国土に救い入るに在りと云い、以てこの人生と社会と国家とを擧て止むを得ざるの付帶物となすが如きは、尤も恐るべきの異端なり」と述べている。これは、魂の救いと永遠のいのちを救いの重要な価値と信じた上で、現世の変革を主張しているというよりは、横井にとって、来世や天国が救いにとって二次的なものであったといえよう。

また彼は、すでに「教育と宗教の衝突」をめぐる井上哲次郎を批判した「德育に関する持論と基督教」(『六合雑誌』、144 号、1892 年 12 月 15 日)において、同じくキリスト教の現世的性格を強調したのである。

横井が明確に新神学にシフトするのは、彼が 1894 年 12 月に『我が国の基督教問題』を刊行した時である。『我が国の基督教問題』の序文は、新神学を報じていた哲学者の大西祝<sup>はじめ</sup> 1864-1900) が書いている。大西は、『六合雑誌』の編集をしつつ、東京専門学校(現早稲

田大学）で哲学を講じていた。大西は序文の中で、横井の書物の目的とする所を、「其旧觀念の根柢たる旧神学の破壊さるべき所以を論じ、新神学の破壊されざるべき基礎を開く」<sup>8)</sup>と述べている。

横井は、『我が国の基督教問題』において、人間について「夫れ人の心はその奥底においては善なりといわざるべからず、善なるが故に吾人はおのづから善ならん事を思い、また善を為さんことを考う、これ宗教の因りて立つ所の地盤なり」<sup>9)</sup>と性善説を述べているので、人間の罪、またキリストによる罪の贖いは信仰の内容に入っていない。彼にとって基督教は、「人間の至情を説き、人世の眞実を發揮し、神人和合の眞意を體實」することを目的とし、キリストを仰ぎ、彼を大師友として、その目的に近づくものであった。<sup>10)</sup>

ここにキリストの十字架の贖いは明確に否定され、すでに述べた金森、そして後に述べる海老名と同じ「神人和合」の思想が展開されている。

#### ４ 内村鑑三の横井時雄の新神学批判

すでに「不敬事件」の所で述べたように、横井は不敬事件で失意にあった内村を助け、内村夫人の死に際しては、葬儀の司式もしている。組合教会の中で内村が最も親しかったのが横井時雄であった。

横井は、すでに述べた通り、1891年10月15日の『六合雑誌』（130号）において、「我信仰の表白」を掲載していたが、それに対して内村は、同年11月15日に発行された『六合雑誌』（131号）において、同名の「我が信仰の告白」を寄稿して、横井時雄を批判している。ここでは、彼の主張を『内村鑑三全集』1巻から引用する。

まず三位一体論である。キリストの神性を否定する新神学に対して、内村は、「基督は人にあらずして神と同一なり、即ち神なり。……聖霊は神と同一なり、即ち神である」（『内村鑑三全集』①－212～213）と述べる。次に原罪であるが、内村は、「余は始祖の原罪なるものと共にいわゆる人心の全然墮落説を信じるものなり。」（①－215）と主張する。更に「贖罪説」については、「基督の贖罪は此罪より離れし人類を再び神に呼び返すの道なることを信ず。余の知る所によれば基督の十字架を除いて他に余をして神に返らしめるの道をしらず。」（①－215）と述べている。次に、来世については、「余は人霊は其軀と共に朽ちざるものなることを信ず。……余は亦肉軀の復活を信ず。」（①－216）と述べて、魂の不滅と基督の再臨に伴う身体のみがえりを肯定する。また「聖書論」においては、聖書靈感説を主張して、「余は聖書は神の人類に給いし特別の天啓なりと信じるものなり。」と述べる一方、「余は聖書は一言一句悉く誤謬なき神の黙示とは信ぜざるなり」と「逐語靈感説」を否定している。

また内村は、横井が『六合雑誌』に1892年10月5日に書いた「現世的基督教」に対しても批判的であった。キリスト教の救いを個人的な罪の赦しと永遠のいのちと理解するよりは、現世的、かつ国家主義的な変革の思想ととらえる横井とは、内村の信仰理解は全く異なっていた。来世や天国を否定、ないし軽視する横井の信仰は、内村にとって信仰の本質からの逸脱である。内村は、1891年4月に彼の処女作である『キリスト信徒の慰め』を書くが、その冒頭に「余のためにその生命を捨て余の先愛内村加寿子に謹んでこの著を献

ず、願わくは彼女の霊天に在りて主と偕に安かれ。」と記されてある。そしてこの第1章の「愛する者の失せし時」において「余は天国と縁を結べり」と天国を身近に感じ、「余の愛するものの肉体は失せて、彼の心は余の心と合せり」と天国での再会の希望を表明している。まさに横井と内村の信仰は同床異夢であった。横井は、内村のように罪との戦いをしなかったし、それだけにキリストの十字架の贖いの価値を会得できず、死を超えた天国への希望も希薄であった。

1893年7月8日から19日まで、基督教青年会主催の第五回夏期学校が須磨で開催され、講師に本多庸一、宮川経輝、小崎弘道、押川方義、海老名弾正、大西祝、植村正久、内村鑑三が招待された。7月17日の午前中に、横井は「宗教上の三大理想」、内村は「学生と新聞紙」と題して講演したが、その時のことが、『福音新報』（124号）に次のように報告されている。

「本日午前の講演は、頗る面白かりき、けだし我邦基督教会中の最も天真爛漫たる二人物が、遠慮会釈もなく、名を思う処を吐露せられたればなり。この二人物とは、誰しも予想せらるる横井時雄君（宗教上の三大理想）と内村鑑三君（学生と新聞紙）なり、内村君の講演の冒頭に曰く、我邦の基督教会に二個の禁物あり、横井時雄君の新神学と内村鑑三の日本教育論なり。」（『内村鑑三目録1892-1896』、92頁）

横井は、内村が書いた『求安録』に対して、『六合雑誌』（153号、1893年9月15日）に書評を書き、イエスの贖罪論を聖書の中心的テーマと認めつつも、イエスの死は人間の英雄的な死と特別に異なるものではないと、贖罪を否定している。当然内村は、親友の横井を批判し、1893年10月15日の『六合雑誌』に、「六合雑誌記者に申す」と題して反論し、次のように述べて、キリストが神であり、キリストの贖罪の死のみが罪の赦しにとって有効であることを指摘する。内村の信仰告白である。

「基督の死のみが充分なる罪霊の救いなり。そは人（社界）に対する罪（社交上の罪）は、人に依て救はるべけれども、神に対するの罪（心霊上の罪）は、神のみ救い能うなり。故に生は云う。基督は神の神（The very God of very God）なりと。」（『内村鑑三全集』、②－254-255）

ところで、内村の新神学、自由主義神学に対する批判の源泉は、彼の神学研究ではなく、彼自身の実存的な救いの経験にあった。

彼の『求安録』や『余はいかにして基督信者になりしか』は、新神学論争と同じ時期、ないしそれ以降に書かれたものであるが、彼の罪責論やキリストの贖い、聖書靈感説が単なる教義ではなく、彼の罪との戦いによって会得されたものであることを示している。彼の体験そのものが自由主義神学に対する反証であった。後に述べるように、植村が神学的に自由主義神学に対して戦ったとするならば、内村は自己の信仰の体験から、新神学に立ち向かった。

彼は、自分の信仰の経験を、『求安録』に書き記した。『求安録』は、熊本時代に原稿が完成し、京都で出版された。この『求安録』は、内村の魂の軌跡であり、罪に悩む鑑三の戦いが描かれている。最終的に内村は、イエス・キリストの十字架を仰ぎ見て、魂の平安を得るのである。ここで重要なのは、内村が人間に対する「楽観主義」の中に、新神学を



入れていることである。新神学は、「神は愛なれば、汝の罪を責めたまうの理なし、人類の墮落未来の刑罰、共に中古時代迷信家の妄想にして十九世紀の學術は、已にこれを排除」（『内村鑑三全集』、②－179）するもので、「純粹基督教」のように罪の問題を厳格に扱わないのである。内村にとって新神学は人間の罪の問題を回避して、キリストの贖罪を否定するものに他ならなかった。内村は、浅田タケとの離婚を契機として、深刻な罪との戦いの中で苦悩している時に、アモースト大学の学長シーリー（1824-189）のことはによって真の回心を経験した。

「内村、君は君のうちを見るからいけない。君は、君の外をみなければならない。なぜ自分の内を省みることをやめて、十字架の上に君の罪を贖い給いしイエスを仰ぎみないのか。」

内村は、このシーリー学長のことはを通して、自分の罪を神の子イエス・キリストがすべて負って、十字架の苦しみを受けたことにより、神の愛と罪の赦しが宣言されていることを知り、狂喜した。

内村の『求安録』と『余はいかにしてキリスト信者になりしか』は、罪との戦いからキリストの十字架における贖罪を経験した内村の spiritual journey であり、それ自体が、原罪を否定し、十字架の贖いを否定する新神学に対するポレミクであった。内村の書物は、神学上の議論とは異なり、多くの人に読まれ、愛されたので、それだけ大きな影響力を及ぼし、間接的に正統的神学の普及に役立ったのである。

## 5 内村の横井時雄に対する評価

横井は、新神学を提唱した後に本郷教会の牧師を辞め、その後、エール大学神学校に留学、同志社の第三代社長を経て、1902年（明治35年）3月に逓信省の官房長に就任、そして1903年に立憲政友会の衆議院議員を務めた。しかし、1909年に日本製糖汚職事件に連座し、衆院議員を辞職し、その後20年ほどの長期療養を経て、1927年に死去している。

内村は、金森や横井を念頭に置いて、1902年（明治35年）に、「政治と宗教」と題して、『万朝報』に以下のように熊本バンドの人々について書いている。そこには、人間的に親しかった熊本バンドの人々に対する厳しい評価が綴られている。

「今や伝道事業をなげうって政治界に打って出るもとの基督教の教師がだいぶある。しかもこの種の宗教家は新教派の教師の中に多い。しかも組合派の人に多い。しかも同志社出の人の中に多い。これは最も奇妙なることである。もちろん政治とても悪い事ではない。……しかしながら余輩のどうしてもわからないことは、彼らがキリスト教の伝道をやめたことである。彼らは何がゆえに、かくも有益なる、かくも愉快なる、かくも自由なる事業を捨てしか、これ余輩の知らんと欲して知るに苦しむことである。彼らは実に真正のキリスト教の真味を味わったことがあるのであろうか。もしありとすれば、何ゆえに其の伝道をやめたのであろうか。」（『内村鑑三全集』、⑩－232）

内村は横井時雄の死を追悼して1928年4月14日に東京青山会館で行われた追悼演説会で、追悼演説を行った。この追悼演説会には、内村の他に、徳富猪一郎（蘇峰）、小崎弘道などが参加し、演説を行っている。この演説は、『故横井時雄君追悼演説集』（1928年、ア

ルパ社)に収録され、『聖書之研究誌』(1928年5月)に「故横井時雄君の為に弁ず」として再録されている。ここでは、『内村鑑三全集』31巻から引用することにする。内村の追悼演説は横井に対する共感に満ちたものであるが、同時に横井に対する内村の複雑な思いが吐露されている。少し長くなるが、紹介しよう。内村は、横井が宗教界を離れて、政治の世界に入ったことを回想して、次のように述べている。

「君！伝道ではとても駄目だよ。僕は……ああ、横井君、あの時を憶うて僕は今尚涙がこぼる。あの時は、君のライフのクライシスであった。ああ、あの時僕等君の友人は、なぜ君を引き止め得なかったであろうか。……君と相前後して金森君も当分伝道を止め、松村君も方法を改め、押川君も他に方向を転じました。……政治界を退いて、君の公的生涯は終わりました。みようによっては、これで、君の生涯そのものが終わったといえましょう。しかしながら神は知り給います。君自身にとりては、その残りの生涯が最も大切な生涯であったことを。君の長所であって、また短所であったことは、君があまりに国家社会を思いて自身を思はなかったことであります。君の信仰までが国家的でありました。私はその点において、しばしば君と議論を闘わしました。私は靈魂の救いの大切さを唱えましたに、横井君は国家人類の救いの大切さを説かれました。舞子の浜にひらかれし青年会の夏、学校において、横井君が現世的基督教を主張せられし後を受けて、私は同じ講壇に立ちて来世的キリスト教を主張しました。至って仲は良くありましたが、宗教論をたたかわすたびに、議論はものわかれになりました。要するに君は外にひろがらんと欲し、私は内に深からんと欲したのであります。」(下線部筆者、『内村鑑三全集』③1-152~156、下線部引用者)

そして内村は、横井の晩年の20余年の生涯が、再度キリストに立ち返る期間であったと主張する。

「君はこの間に神の栄光を君自身のうちに拝しました。現世は恃むに足らずして、来世に真の安息を得られました。キリストは君の靈魂の救い主として、新たに君に現れました。君はその生涯の終わりに於いて、君が青年時代に見出し得た神の子イエス・キリストを君の心に迎えて、今やこの世の智識も、政治も、宗教も、君の清き心を誘うことなく、英語をもって *Nearer my God to Thee Nearer to Thee* と歌いつつ静かに眠って呉れたと信じます。」(③1-156)

横井は、病気との戦いの中で本来の信仰に立ち返ったのである。否、真にキリストの十字架の救いを経験したのである。内村の追悼演説は、神の視点から見た愛情にあふれた演説であった。神学上の対立にもかかわらず、内村の横井に対する友情は変わらなかった。

次に私たちは、いったん内村から離れて、日本の明治期の教義史、教会史にとって重要な論争である植村一海老名の論争に言及することとする。

## Ⅱ 植村正久と海老名弾正の神学論争

### 1 植村の新神学批判

1890年代、そして1900年代の植村は、不敬事件に見られるように良心の自由を侵害す

る国家主義に対して戦うと同時に、もう一つの戦いに勢力を注いだ。それは、キリスト教会における新神学ないし自由主義新学に対する戦いである。

植村は、新神学を、イエス・キリストの贖罪を否定する近代合理主義の産物であると批判した。新神学に対する植村の戦いは、1891年7月に金森の『日本現今及び将来の基督教』に対する批判を『日本評論』に「日本現今及び将来の基督教」という同名で掲載することから始まった。植村にとって金森の議論は、「聖書に対し、奇蹟に対し、天啓に対し、キリスト神性説、贖罪説等に対して、破壊的な評言」であり、明晰さがなく、論拠に欠けるものであった。

この戦いは、約10年後の1901年から、当時の本郷教会牧師の海老名弾正とキリスト論をめぐり、約1年間論争することによって頂点に達する。後に植村は、自由主義神学に対抗して神学教育を強化するために、1904年東京神学社（現東京神学大学）を設立し、神学教育の重要性を訴えた。熊本バンドが、新神学や政治に傾斜していくのに対して、植村は、教会形成と、その健全な信仰の基盤としての神学研究に尽力を傾けた。他方内村鑑三は、聖書研究に向かい、1900年に『聖書の研究』誌を発行する。

すでに、植村は不敬事件の3ヶ月後、『福音新報』に「近時神学界の所感」を書き、新神学が「明白なる聖書の教理」に反することに警告を発していた。

ドイツの自由主義神学は、1888年頃から日本に輸入され、影響を及ぼした。植村は、「ドイツ流の極端自由主義神学は、活けるキリスト教を扶植し、力ある教会を設立し、剛健なる伝道機関を造るには、適せざるものと覚し。」（『植村正久著作集』④-240）と述べている。ドイツの自由主義神学者の中で最も日本に影響を及ぼしたのは、植村によれば、プフライデラーである。植村は、彼について次のように述べている。

「彼の思想は、講壇に文章に随分広く紹介され、波乱を起こしたり、信仰を破壊したり、思想の開発を促したりする点において甚だ大いなる勢力であった。……彼はキリストの神性を否定した。奇蹟を排斥することは無論、贖罪などはその顧みざるところである。プフライデラーは、積極的また消極的に日本のキリスト教思想にただいなる影響を及ぼした外国神学者の一人である。」（同、④-244）

彼の影響を受けた人物として、植村は海老名弾正や松村介石（1859-1939）を挙げている。当時、一高の学生たちは、内村鑑三、植村正久、海老名弾正の影響をうけていた。京都学派の哲学者である田辺元（1885-1962）は、『キリスト教の弁証』（1948年）において若き日を回想して、当時におけるプロテスタント指導者の精神的影響力について次のように述べている。貴重な証言である。

「それには、当時の日本のキリスト教界に、内村鑑三、植村正久、海老名弾正氏の如き有力な人が居って、その結果キリスト教の影響力が大きかったということもある。その前後の一高生の中、精神主義が徹底的に強くして純粋であった少数の人々は、角筈に内村に教えを求め、堅実なる信仰と共に、キリスト教に関する学識を要求する人は番町教会の就き、更に比較的多数の人々は、壱岐坂教会（本郷教会）に海老名氏の説教を聴いたようである。」<sup>11)</sup>

1900年4月、大阪で開かれた超教派の福音同盟会（1885年から「全国基督教信徒大親睦

会」を改称)で「二十世紀大挙伝道」が決議され、1901年から全国伝道が開始された。そして1901年6月に福音主義の信仰に疑義がある海老名弾正を講師から除外することが決められたことから、植村—海老名論争が始まったのである。

植村は『福音新報』(324号、1901年9月11日)に「福音同盟と大衆伝道」を掲載し、福音同盟会はクリスチアンの親睦団体であって、伝道の基盤である福音主義の内容が曖昧なので、ユニテリアンも含むことになり、福音伝道で一致できないと主張した。そして彼は、福音主義を、「余輩は神、人となりて世に下り、十字架に死して人の罪を贖いたるを信ず。而して余輩の信ずる耶蘇基督は活ける神のひとり子にして、人類の祈りを受け、礼拝を受けべきものなり。基督は人類よりこの上なき崇敬と愛とを受くべきものなり。この信仰を主張し、この信仰を人に伝えるを以て主義とするは余の伝道なり。」という信仰告白に根拠づけようとした。それに対して海老名は『新人』(2巻3号、1901年10月1日)の「福音新報記者に興うるの書」において、植村の信仰告白を批判し、神が人となることは神の永久不変の性質と矛盾すること、三位一体論(父なる神、子なる基督、聖霊なる神は神であることにおいて一体であるが、それぞれペルソナを持っているという教理)を三神論として批判した。そこから植村—海老名の神学論争が約一年間行われることになる。その結果、1902年4月に福音同盟会は、植村の主張を採用し、海老名弾正や新神学の主張者を福音同盟会から排除した。植村の正統的な信仰の理解が勝利した瞬間であり、これ以降の日本のプロテスタントの教会の方向性が決定した時であった。

## 2 海老名弾正の新神学

### 2.1 海老名弾正の同志社時代

それでは、海老名はどのような信仰を持っていたのであろうか。海老名弾正は、柳川藩士の子として生まれ、熊本洋学校に学び、ジェーンズの影響で熊本バンドに入った一人である。彼は、同志社では、特にキリストの贖罪論をめぐって、ディヴィスと対立した。海老名は、同志社時代を回想して、自らの神学的立場について以下のように語っている。

「キリストの奇跡は我々の信仰には邪魔になるとも利益になるとも思えなかった。特にキリストの肉体の復活説には反対であった。ジェーンズ先生は、肉体復活説には反対であった。……処女誕生の記事の如きも、むしろそれなきことを願うたのである。……旧約書の記事にも、新約書の記事にも、科学的説明のできないものは除去したかったのである。人性悪の教えには反対であった。我々は性善説を信じて居った。この性善は、我々が意識する所であって、否定すること能わぬ所であった。……キリストの十字架は、真理の為、世界人類の為に献げたる大なる犠牲と見た。故に凡そキリストの徒たる者は、この十字架を負う覚悟を要する。……自己の罪咎が、キリストの十字架の死によって贖わるるということは、我々は知りもせず、思はなかったのである。」(下線部引用者)<sup>12)</sup>

### 2.2 神戸教会時代

海老名は、同志社卒業後、1879年から群馬の安中教会で牧師をし、1887年に熊本に移転

し、教会を建て上げると同時に、翌年熊本英学校を設立している。1890年10月以降、彼は組合教会の日本基督伝道会社の社長として、アメリカン・ボードからの独立を主張し、1893年に神戸教会の牧師に就任した。1895年には、海老名が中心となって、奈良の組合教会教役者大会で奈良宣言が発せられている。

海老名は基本的にジェーンズの神学を継承していたが、安中教会の牧師としてはそのことを語ることを封印していた。彼は、自らドイツ神学を学ぶことによって、自らの初期の信条に確信を持っていた。そしてそれが牧師としての説教に現れるのが、神戸教会時代（1893.9-1897.4）である。この時期の前後に、金森通倫も横井時雄も新神学に「転向」している。この時代における海老名の発言と行動を3点紹介しておくことにする。

第一点は、神戸教会時代の海老名の説教を聞いて、危機感を抱いたのが神戸英和女学校（現在の神戸女学院）の院長代理で宣教師であったスーザン・A・ソウルである。彼女は、1893年11月8日付の書簡で、アメリカン・ボードの本部幹事のN・G・クラークに以下のように書き送っている。

「あの方〔海老名弾正〕は、キリストを称揚なさる一方、我々もまた程度が違うだけで、意味の上では同じ神の子であることを理解するようにと、ご自分の会衆に言い聞かせられました。その説教は、公然と宣言されたわけではありませんが、受肉と復活を含めて奇跡というものに対する不信心を表明していると聴衆に受け止められるようなものでございました。」<sup>13)</sup>

スーザン・A・ソウルは、この海老名の説教を聞いて以来、神戸英和女学校の生徒を神戸教会の礼拝に参加させない方針をとった。

この時代は、日清戦争前後の時期にあたるので、海老名も講壇から「忠君愛国」を語り、国家主義を訴えた。しかしそれ以上に、彼の神学そのものが、正統的信仰から逸脱していた。海老名はその時のことを、「当時我が内外の教師に危険視されたのは、我が独立主義よりも、忠君愛国主義よりも、専ら神学思想であった。」と回想している。<sup>14)</sup>

第二点は、海老名が神戸時代に『六合雑誌』（158号、1894年3月15日）に寄稿した「基督の教」の内容である。

ここで海老名は、基督教には様々な教派、様々な聖書解釈があるので、「新旧約聖書は、万古不易一定不変の大真理のみを教示するも」ではないと述べている。（『六合雑誌』、<sup>158</sup> - 3）。また新約聖書は、書かれた時代の思想や編纂作業に影響されているので、必ずしも基督の教えを伝えていないと考えた。特に彼は、パウロやペテロの書簡ではなく、イエスの教えに注目すべきことを説いている。

また海老名にとって大事なことは、「敬神愛民」であって、それに比べれば、「天啓論」や「贖罪論」、「三位一体論」は、副次的なものであった。（同、<sup>158</sup> - 5）つまり海老名にとって基督教は、倫理的なものであり、「敬神愛民」を実現するための方法であった。そして基督は、「敬神愛隣の大道を实践する」模範的な存在であった。（同、<sup>158</sup> - 11）基督者は、基督に倣って、自らの意思を以て、この大道を実現すべきである。彼にとって「贖罪論」、「三位一体論」といった信仰箇条は、「敬神愛隣」の大道を妨げ、「思想の自由」を妨げるものである。彼は、「ああ、基督の教えは実に簡明にして、純乎たる倫理的宗教たるや



知るべきのみ」(同、⑤⑧ - 12)と結論づけている。

第三点は、1895年に海老名が中心となって、奈良の組合教会教役者大会で奈良宣言を起草したことである。その内容は、以下の通りである。

「我、耶蘇基督を救主と尊信し、神の召しを蒙れる者、大に時勢に慨する処あり、ここに南部に会して天父に祈願し、聖霊の恩化に浴し、遂に左の綱領に従いて福音を宣伝し、神の国を建設せんとすることを決す。

- 一 罪惡を悔い改め、基督によりて、天父に帰順すべきこと
- 一 人は皆神の子なれば、互いに愛憐の大義を全うすべき事
- 一 一夫一婦の倫を保ちて、家庭を潔め、父子兄弟の道を尽くすべき事
- 一 国家を振興して、人類の幸福を増進すべき事
- 一 永生の望みは、信と義によりて全うせらるる事

明治二十八年十月二十四日」

この宣言を一読すると、小崎弘道が中心となって、1892年の組合教会の設立の時に定めた福音主義に立脚する信仰告白と根本的に異なることが明白である。1892年の9箇条の信仰箇条には、聖書が神のことばであること、三位一体論、原罪論、キリストの受肉、十字架による贖罪、キリストの復活、そして靈魂不滅と身体のよみがえり、信仰義認が明確に書かれていた。しかし1895年の奈良宣言では、どちらかという倫理的な規範が中心となっていて、信仰の中心的な教義が消失している。1892年の組合教会の信条と1895年の奈良宣言を、前者は組合教会の信条、後者は教役者の指導原理と区別することは可能であるが、1892年の重要な信仰箇条に対して海老名が疑念を持っていることを考えると、これは、組合教会自体の変質の表れといえよう。神戸時代、そしてその後の本郷時代の海老名の影響力によって、組合教会自体が、自由主義神学に次第次第に傾斜していくことになる。

### 2.3 本郷教会時代

海老名弾正の生涯の最も輝かしい時期は本郷教会時代(1897~1920)であり、特に青年たちに大きな影響を及ぼした。海老名の影響力に関して、土肥昭夫は、「海老名弾正の神学思想」の中で、以下のように述べている。

「彼〔海老名〕は、1897年から1920年3月まで、本郷教会の講壇をまもり、月刊誌『新人』(1900年7月創刊)、さらに『新女界』(1909年4月創刊)を刊行して、時代の諸問題を提起し、キリスト教界、思想界に著しい影響を与えた。本郷教会は明治後期が最も華やかな時代で、日曜日には、600人の会衆が集まり、特に学者や学生は彼の講壇に共鳴し、感動した。」<sup>15)</sup>

そして植村と海老名の神学論争は、海老名の本郷教会時代において行われた。それは、正統的な神学か、自由主義神学ないし新神学かという重要な路線をめぐる対立であった。鶴沼は、植村と海老名の信仰上の相違について以下のように述べている。

「福音の本質をめぐる植村と海老名の論争は、こうしたそれぞれのキリスト教理解を背景として、交わされたものである。植村は、海老名における罪の意識の欠如をつきながら、キリスト教の根本義は、神の子キリストの受肉降世、十字架の死と復活による

人類の罪の贖いにあるとして、伝道の目的はこの福音の信仰へと人々をいざなうことにあるとした。これに対して海老名は、右のような独特のキリスト教理解に基づいてキリストの神性と贖罪の正統的理解を否定し、キリストの生涯と教説の目的は、人類を導いて神人合一の境に到らせることにあると主張した。」<sup>16)</sup>

### 3 植村—海老名論争

ここでは、植村と海老名の神学論争を、植村が主筆をつとめる『福音新報』と海老名が主筆を務める『新人』の論稿を中心にして、跡づけることにする。<sup>17)</sup>なお『福音新報』は、週刊誌であるが、『新人』は月刊誌である。

植村は、1901年10月9日の『福音新報』において、「海老名弾正君に答う」において次のように述べている。

「貴殿が、キリストを神にあらずと断定なされ、もしくは神人となりしという説に駁撃を加えられるか、キリスト信徒の歴史的に継承し来たれる信仰に向かい非難を下される様なことを公然ご議論あらば、その時こそ小生も、キリスト教信仰の主張者、弁護者として、非キリスト教信仰のなることを公示せられたる貴殿と論戦を開くことをも辞せず。」（『植村正久著作集』④—329）

これに対して海老名は、「植村正久氏の答書を読む」（『新人』2巻4号、1901年11月1日）において、植村氏が言う「キリスト信徒の歴史的に継承し来たれたる信仰」とは、「日本基督教会が信奉しているカルヴァン派の信仰」であり、自称正統派を称して異端を排斥するようなものと批判する。（②—4—4）ここでカルヴァン派といっているのは、海老名が神の内在を強調するのに対して、長老教会のカルヴァン派が神の超越や予定を主要な教義にしているからである。しかし海老名の神学は、プロテスタント教派間の信条の相違に関するものではなく、様々な教会が共通の土台としている「使徒信条」に対する批判であるので、それだけ深刻であった。つまり、海老名は、キリストの「受肉」、三位一体論などを、「古代の哲学思想の生み出せる神話的教説」（『新人』2巻5号）とみなし、植村の言う信仰の「歴史的継承」を、「古代の形骸を気ままに伝える」ものに他ならないと批判するのである。

次に植村は、1901年12月11日の『福音新報』に「海老名弾正氏の説を読む」と題して、海老名の聖書の高等批評、キリストを神と認めないこと、三位一体論の否定に対して、「吾人はキリストの神性を信じ、聖霊の神性をも信じ、また三位一体の教義にも深遠なる宗教的真理の包蔵せらるるを信ず。」（『植村正久著作集』④—336）と自らの信仰的立場を明らかにしている。

これに対して海老名は、『新人』（2巻6号、1902.1.1）の「新年の辞」において、従来の受肉論、三位一体論、基督再臨に対抗して新しい時代に応じた新神学の必要性を訴えている。また彼は同号の『新人』に「三位一体の教義と余が宗教意識」と題して植村の批判に対して、自らの基督論を詳細に展開している。この論題から推察されるように海老名にとって重要なのは、固定した教義ではなく、宗教的経験や宗教的意識であり、それは、キリスト教の正統な神学的な信条を内側から破壊するものであった。海老名は、彼の重要な

宗教意識として、第一に天地の神が君主であることを感得し、主我主義から主神主義に転回したこと、第二にキリストに倣って、「神は我父にして、私はその愛子である」という神の子としての意識、赤子の意識を挙げている。それは、基督が神ともっていた「父子有親」の意識と同様なものである。（『新人』②－6－14～15）そして三位一体の教義は、基督信徒の「神人合一の意識」を説明するためのものに他ならない。そして祈りはキリストに対してではなく、ただ天父に対してだけ捧げるべきであり、「キリストに礼拝と祈祷とを捧ぐるがごときは」、キリストの霊を有する基督者のすべきことではないのである。（②－6－19）

ここにおいて、海老名が、イエス・キリストを礼拝すべき神としては認めず、「神人合一」をすでになしとげた模範的人間として想定していることは明白である。植村にとってそれは、聖書の真理からの大きな逸脱にほかならなかった。植村は言う。

「余輩はキリストの贖いを忘却し、その十字架の意味を埋没し、僅かにキリストと神との間に親交ありという事実により、その宗教心に訴えて十分に神の衷情を認識せんと欲するは、ほとんど木に縁りて魚を求むるの類なりと断言すると憚らず。」（『植村正久著作集』、④－348～349）

なお植村が依拠していた十字架の意味は、基本的に刑罰的代償論であった。彼は後に『福音新報』（1045号、1915.7.8）において、以下のように述べている。

「福音主義の信仰は、罪の赦されることを高調すると共に、その既に当然審判せられ、処置せられおわりたるをも力説して止まぬ。キリストの十字架は、人類が自ら罪惡の報いを受けて、その刑罰に服するよりも一層明らかに、かつ十分に、神の審判とその宣告とを表明して少しも遺憾なきものである。」（『植村正久著作集』、④－471）

最後に植村は、自分と海老名との違いを、以下のように要約している。

「海老名氏は、キリストの神格を信ぜざるなり。そのキリスト教はキリストを宗にせず、これを崇拜するものにあらず。余輩はキリストの神たるを信ず。キリストは人となりし神なり。余輩はキリストの内在と偏在とを信ず。余輩はキリストを礼拝し、またこれに祈りを捧ぐ。海老名氏は、キリストを師表として仰ぐのみ。余輩は然のみならず、これを救主なりと信ず。」（同上、④－350～351）

海老名の聖書観、基督論は、生涯変わることはなかった。海老名は、神学論争から約20年後の1922年、同志社総長として同志社教会で聖書について、「バイブルは参考書として読む。けれども宗教的経験はそれだけではない。聖書は手紙である。けれども、二千年前での手紙では満足しない。私は神の赤子である。」と述べている。またキリストの十字架についても、「キリストの十字架の血をみなくは赦されないというのは、クリスチャンの神ではない。我々の神は限りなくこれを赦したもう神である。罪を犯した放蕩息子が恐れながら帰るのを、走って行って抱く、その父がキリストの神である。十字架の血を持って初めて赦すという信条は、神の子が承知しない。」と断言している。

これは、キリストの贖罪の否定であり、罪人の自覚より、神の子という人間の立場が前面にでるあまり、キリストの血の価値が見失われている。総じて、金森通倫、横井時雄、海老名弾正の自由主義進学等に等しく見られる特徴は、人間の罪性の軽視とキリストの贖い

の否定である。

植村—海老名の神学論争の後、福音同盟大会は、1902年4月12日に福音主義の定義として、「聖書を以て信仰と行為の完全なる規範とし、人と其の救いのために、世に降りたまえる我らの主イエス・キリストを神と信じるものである」ことを、紆余曲折の末に決議し、事実上海老名弾正はじめ新神学の立場に立つ人々を福音宣教の共同活動から締め出した。ここに至って、植村の尽力によって、正統なキリスト信仰が明白にされ、教会が従うべき教義として確認されたことは、日本プロテスタント史上重要なステップであったといわざるを得ない。海老名は、金森通倫や横井時雄のように教会を去らず、依然として組合教会に残り、牧師としての働きを続行し、青年たちに大きな影響を及ぼした。しかし逆にいえば、それだけ信仰の逸脱の危険性は大きであった。

#### 4 宮川経輝と小崎弘道

当時、新神学を主張していたのは、すでに述べた金森通倫、横井時雄、海老名弾正だけではなく、大阪の組合教会の牧師である宮川経輝（1892-1920）もそうであった。植村は、1902年1月22日の「キリスト教思想の潮流」において、「宮川氏などもキリストは神ではない、神の代理人だという余り条理の分らぬ説教を昨年の末、公にせられたほどである。余輩は今回の議論で組合教会の趨勢が判然するを見たい」（『植村正久著作集』、④-352）と述べている。更に植村は、組合教会に関して、「毎週新誌記者の言に拠れば、組合教会は既にキリスト学上の謬見に襲撃せられたりと見ゆ。その有力者の信念、キリスト教の本旨に遠ざかるもの多きは、蓋し隠れも無き時事となるべし」（同上、④-356）と批判する。植村は、「罪惡を軽んじ、十字架の真義を忘却せる一種の福音は、靈性の根本を弱めつつあり」と断じ、「実験的にキリスト教の意識を深くし、キリストに関する思想を発揮し、使徒のごとく、ルター、ウェスレーのごとく新鮮にして雄大なる信仰を興さずんば、日本の救われんこと得て望むべからざるなり。」（同上、④-357）と断じている。

組合教会の中で新神学の影響を受けつつも、正統的教義に踏みとどまったのは、植村正久と親しかった小崎弘道であった。彼は、彼の自伝の『七十年の回顧』において、組合教会の衰退を嘆きつつ、その原因について以下のように述べている。

「当時の基督教会、特に組合教会に於ける思想が漸次極端なる自由主義神学に陥り、基督教の本質如何を解する者が、少なくなろうとする形勢のあった為である。組合教会が、明治十六、七年より二十二、三年頃まで旭日の東天に達するが如き勢いをもって発展したのは、その牧師・伝道師がいづれも新鮮なる信仰と体験を有し、基督教は真に人類を罪惡より救うの福音たることを確信していた故である。然るにその後に至り、教勢不振の状態を呈したのは、他にも原因があるが、其の一つは牧師や伝道師が基督教の本質を理解することなく、いたづらに新思想・新神学説を歓迎し、信仰の本質を失った為である。……現に金森・横井の二君を初め、安部磯雄（1865-1949）、村井知至（1861-1944）増野悦興（ましの よしおき）などの諸君は神学説が変わると同時に、信仰生活を離れ、遂に教会より遠ざかった。……新神学に賛成しながらも、尚最初の信仰を維持したのは、海老名、宮川の両君である。しかし、その信仰たるや、……「省略した基督教」であっ

て、「円満なる基督教」でないことをおそれる。』<sup>18)</sup>

「省略した基督教」とは、基督の神性を否定し、神の子としての自覚に基づき、イエスの模範に従って救いを得ようとするものであり、「円満な基督教」とは、イエス・基督の神性を認めて、神に帰るために、神と人との仲保者であるイエス・キリストを必要とする信仰である。

すでに述べたように、植村は、海老名との神学論争を通して、正統な神学を教える神学校として海外ミッションから独立して、1904年に東京神学社、(後の東神大)を設立し、神学研究の重要性を訴えたのである。

### Ⅲ 内村鑑三の植村・海老名に対する評価

#### 1 『聖書之研究』誌における内村の教理問答

植村—海老名の神学論争に関して、内村は一つの論考も発表しておらず、あたかもこの論争に関心であったように思われる。しかし、そうではない。キリスト教、そして教会の将来を決定するような重要な争点に対して、彼は彼なりの立場から発言していった。

内村が『聖書之研究』誌第一号を出版したのは、1900年9月30日であった。その第一頁に、「われ福音を恥とせず」というパウロの言葉が書き記されている。後に述べる植村正久と海老名弾正の神学論争は、1901年9月から1902年7月まで及んでいる。この論争中そしてその後において、彼は、『聖書之研究』誌に重要な神学上の問題に関して、読者にわかりやすく問答形式を用いて説明をしている。

内村は、1902年4月20日付けの『聖書之研究』誌(20号)に「聖書は如何なる意味に於て神の言辭なる耶」において、逐語靈感説を批判しつつも、高等批評には明確に反対した。(『内村鑑三全集』⑩—139～147)更に内村は1905年3月25日のベル宛書簡において、「私は、聖書の言はことごとく神の靈感になるとの見方こそ、この永遠不滅の書に対する最も理にかなった見方である、と常々考えてきました。ゆえに私は、いつも高等批評には信を置きませんでした。」(同、⑥—95～96)と書いている。また内村は、1922年7月22日の日記において、「いわゆる高等批評は、近代人の精神をもってする聖書研究である。こんなつまらいものはない。そうして彼らは、彼らの頼む高等批評をもってして聖書を解することはできない。」(『内村日記書簡全集』、②—203)と述べている。

また彼は、1904年1月21日発行の『聖書之研究』(第48号)誌に「聖書は果たして神の言葉なる乎」を掲載し、「今やいわゆる『高等批評学者』誌なる者が出まして、聖書の記事を縦横微塵に批評し、初めにアブラハムを取り去り、次にモーセを縮小し、今はパウロ、ヨハネまでを半殺しになさんとしつつあるは事実であります。いずれの時代においても聖書の荒乱者なる者があります。そうして今の時代に在ては、この荒乱者は、自ら『高等批評学者』となる者であります。そうして彼らが荒乱のために採る武器は歴史であります。彼らは歴史的に聖書を覆滅してその覆滅を全うせんとしつつあります。」(『内村鑑三全集』、⑫—14)と述べている。

また彼は、「キリスト教の問答 キリストの神性」において、キリストの神性を信じなく



でも、キリスト信仰は成立するのではないかという質問に対して、キリストの贖いの事実にとってキリストの神性は不可欠であると主張し、「キリストは私の罪の贖主であります。故に彼は、私の救い主、私の神であります。」（同上、⑪－312～313）と述べている。

更に内村は、「なぜキリストの神性を認めたのですか」という質問に、「私の全存在」(whole being) によってそれを経験したとして、特に罪の問題を挙げている。

「それは、私が罪人であるということを発見したからであります。……自己の罪を恥じ、良心の平安を宇宙に求めて得ず、煩悶の極、たすけを天に向かって求めました時に、十字架上のキリストが心の眼に映り、その結果として罪の重荷は全く、私より取り去られました。……私は罪とは人に対して犯したものではなくして、神に対して犯したものであることを知りますゆえに、この罪の苦悩を取り去ってくれた者は、必ず神ではなくてはならないことを知ったのです。……罪悪問題とキリストの神性問題とは、その間に極く緻密なる関係を有つものであります。実に罪の何たるかを知らずして、キリストの誰なるかは到底分からないと信じます。」（同上、⑪－333～335）

内村に言わせれば、金森通倫、横井時雄、そして海老名弾正は罪との戦いを経験せず、それゆえキリストの贖いの必要性を理解していない人々である。

また彼は、1904年2月18日の『聖書之研究』（49号）において、「三位一神の教義」を発表し、やはり問答形式で、この問題について解答している。

彼は、「三位一体」とはどういう意味ですか、あなたはそのことを信じますかと聞かれて、「神は一つである。然し単独（unit）ではない、彼は三つのペルソナ（persona）として存在する、しかし三つの異なった神があるのではない、父、子、聖霊、おのおの神であって、そうして神とはこの三位の一致したる者（unity）であると、こういうことであります。」と述べて、自分は三位一体を否定するユニテリアンではないと主張する。内村にとってイエスの神性と三位一体論は表裏一体の関係にあった。また彼は、キリストの贖いがいかに三位一体と関係しているかについて以下のように述べている。

「単独の神は、地を遠く離れて高く、独り天にとまる神であるのみならず、かかる神は、また罪人とは全く関係のない神であります。単独の神は地球にまで及ばない神であります。三位の神を待って始めて救いの神はあるのであります。罪の赦し、贖いなどは、三位一体の神にあらざれば、我らのために成しとぐることのできない事であります。それ故にご覧なさい。三位の神を拒むユニテリアン教徒は、贖罪を拒みます。神が肉体を取りて、人類の中に降り給いしとの事の如きは、かれらが神に対して抱く觀念から割り出してみて、決して有り得べき筈のものではありません。十字架上の罪の贖いのごとき貴き教義は、三位の神を信じない者の到底解し得ないことであります。」（『内村鑑三全集』、⑫－68）

なお内村にとってイエスの十字架は、植村と同様刑罰的な代償論であった。内村は、彼の弟子の藤井武（1888-1930）が、1916年3月発行の『聖書之研究』に「単純なる福音」と題して、「人の救わるるは、イエス・キリストの十字架に顕れたる神の愛を信じるに由る」と書いたことに異議を唱え、4月発行の同誌に「神の忿怒と贖罪」を掲載し、「神は愛である。しかして愛なるがゆえに彼は、罪に対して熱烈の忿怒を発し給うのである」（『内村鑑

三全集』②-237)と藤井を批判し、「キリストは、十字架において、人類を代表して人類の受くべき罪の適当なる結果(刑罰)を己が身に受けたもうたのである。」(同、②-239-240)と述べ、最後に、「余はキリストが我等の罪の代わりに十字架において罰せられたという事を信ずる者の一人である。」(同、②-245)と、藤井に対する反論を明確にしている。

## 2 内村鑑三と植村正久

内村と植村との関係は性格が合わなかったこともあり、実質的にその関係は疎遠であった。ただ内村が『聖書之研究』誌を始めるまでは、植村が主筆を務める『福音新報』に寄稿したり、植村が牧師をしていた一番町教会で説教する事もあった。内村は、1925年1月に植村が死去した時の日記に、「君は明治十二年以来の知人である。しかし気質の異なるゆえに親交に入る能わずして終わった」と書いている。しかし気質の違い以上に、内村が既成の教会を批判して、「無教会主義」を昌道したことが、二人の関係を疎遠にした主要な理由であろう。

これに対して、内村は、熊本バンドの組合教会の指導者とは親しい人間関係を持ち続けた。しかしより巨視的な視点でみるならば、内村は新神学、自由主義的神学に傾斜する横井、金森、海老名たちの熊本バンドよりも、正統な神学を貫き、福音主義に立ち続けた植村に共鳴をしていたのではなかろうか。山路愛山は、この点に関して、「今日、日本にて三十年来一日の如く、所謂正統教会の教理を固執し、之をその学問、見識にて堤防し、世と戦って屈せざるものは、唯だ氏〔植村〕と内村鑑三あるのみ」と述べている。<sup>19)</sup>

内村と植村は、教会と無教会という点では対立はあったものの、こと正統的な信仰という点では、一致していた。

内村はベルアテ書簡において、植村を「第一人者」と呼び、「彼は、ロンドンやニューヨークの一流の講壇に立たせても遅れをとらぬ程の人物」と評し、「彼の講演については、「いずれも、堅実な、深刻な、同時に学者の講演である」と高く評価している。

『植村正久とその時代』を編集した佐波亘は、『回想の内村鑑三』(鈴木俊郎編、岩波書店)の「思い出」の中で、植村が死んだ時、内村が植村の家に行き、遺骸が安置されている部屋に行き、植村の顔をみて、黙とうした後、英語でグレート、グレートと言って別れを告げたことを伝えている。<sup>20)</sup>

内村は上述した日記において、「君〔植村〕の勢力、才能、学識は十分に認めざるを得ない。君去りて日本の基督教界は一変するであろう。」(『内村鑑三日記書簡全集』、④-129)と評している。

この言葉に示されているように、指導者を失った日本の基督教界は、満州事変以降始まった日本のファシズム化の激流に飲み込まれていく。

## 3 内村鑑三と海老名弾正

それでは、内村鑑三は、海老名弾正に対してどのような態度を示していたであろうか。内村と海老名が最初に出会ったのは、1883年の第三回基督信徒大親睦会であった。内村の

正統的な信仰と海老名の新神学は水と油の関係にあったが、なぜか内村は、海老名が本郷教会を牧会していた時は、しばしば同教会で講演している。後に述べるように、海老名は内村の再臨運動に対しては、反対であったが、個人的には内村の死まで、親交を保ち続けている。そこが良かれ悪しかれ信仰の相違によって、人間関係を断絶しようとはしなかった内村の内村たるゆえんであった、

海老名は、内村のことを回想して、自分と内村の信仰の違いについて次のように述べている。

「内村君は、その悲劇の中に言うべからざる宗教的経験を持っておられたと思う。十字架がキリストのハートでありブラッド〔血〕である。ただそこに、あすこに、縋りついていくという、それが内村君の心髄であったと思う。私から見ると、そうはいかぬ、同情はするが、ハートは重んずるが、それが身代わりとはとれない。倫理的・哲学的・歴史的に考える。内村君は単純にハートで考える。その辺のところが違っていた。」<sup>[21]</sup>

海老名は、「内村から見ると私は異端者、正反対な者」であると認めつつも、すでに述べたように福音同盟会から海老名が除名された時に、内村が、「私はお前に同情する、議論ではない、ハートである。」と語ったことを記録している。また海老名が同志社の総長をしていた時に、内村が訪問し、「海老名君、君と俺が死んでしまったら、武士的基督教はなくなるよ」と語ったことを回想している。海老名が内村と共鳴したのは、ナショナリズムにおいてであった。

「我々に非常に強い、深い大なるナショナリスチックの一面があった。内村君は教会主義に公に反対した。然しナショナリズムには反対できない。非常なる気分を持っておった方である。その辺が共鳴する処があった。」<sup>[22]</sup>

また内村や海老名が留岡幸助（1864-1934）の家庭学校に集まり、議論した時に、内村は、海老名にむかって、「おまえら（熊本の連中を意味する）の基督教はナショナリズム（国家主義）だ。植村（横浜の連中をいう）のはエクレスiasチズム（教会主義）だ、俺（札幌を意味する）などはスピリチュアリズム（精神主義もしくは信仰主義）と言った。」という。<sup>[23]</sup> この内村の言葉に、彼の海老名や植村に対する態度が示されている。

内村は、まだ『聖書之研究誌』を刊行する以前に、植村正久が編集する『福音新報』（95号、1897年4月23日）に「時弊談」を掲載し、一方における植村正久と札幌バンド、他方における海老名弾正に代表される熊本バンドの人々に対して、相異なる評価を下している。そこに内村の本音が示されていた。

「今日我邦の伝道者及び教会に対して、無遠慮に批評を下さしめば、学者として最も善く基督教を理解せるものは、○○君なり。個人的な恩怨は暫くおき、この点においては、最も尊敬する所なり。……熊本県人のキリスト教は研究すべき面白き問題なり。試みに花岡山の血判と、札幌農学校におけるクラーク氏のキリスト教信者の盟約とを比較せば、二者間に大なる差異あるを見るべし。一は政党式を行うがごとく、他は宗教的の誓約を結びたるものなり。熊本県人のキリスト教は政治的なり。しかれども、もし熊本県人なかりしならば、キリスト教が今日の如く世間に聞知せらるることなかりしあらん。彼等は吹聴に妙を得たるものあり。したがってキリスト教が蒙りたる弊

害もまた決して甚<sup>じんしやう</sup>少ならざるべし。」(『内村鑑三全集』、④-406)

まさに、その弊害が、内村がこの文章を書いた1897年以降、キリスト教会に一層の混乱をもたらすことを忘れてはならない。ちなみに〇〇君は、植村正久であろう。

注

- 1) 政池仁『内村鑑三伝』(教文館、1977年)、212頁。
- 2) 雨宮栄一『牧師植村正久』(新教出版社、2009年)、21頁。
- 3) (『近代日本基督教名著選集—日本現今の基督教並に将来の基督教、我邦の基督教並に将来の基督教問題』、(日本図書センター、2002年)、143頁。なお金森通倫の『日本現今の基督教』と横井道雄の『我邦の基督教並に将来の基督教問題』は、この『近代日本基督教名著選集』に収載されている。
- 4) 高橋虔『宮川経輝と金森通倫—信仰と人間』(『熊本バンド研究』、同志社大学人文科学研究所編、みすず書房、1997年)、327-328頁。
- 5) 横井時雄『基督新論』(警醒社、1891年)、42頁。
- 6) 同書、45頁。
- 7) 同書、60頁。
- 8) 『近代日本基督教名著選集』、4頁。
- 9) 同書、160-161頁。
- 10) 同書、190頁。
- 11) 『田辺元全集、第十巻』(1963年、筑摩書房)、4頁。
- 12) 渡瀬常吉『海老名弾正先生』(龍吟社、1938年)、129-131頁。
- 13) 關岡一成『海老名弾正—その生涯と思想』、190頁
- 14) 同志社大学人文科学研究会編『熊本バンド研究』、みすず書房、1997年)、28頁  
なお海老名弾正に関しては、吉駒明子『海老名弾正の政治思想』(東京大学出版会、1982年)、金文吉『海老名弾正の思想と行動—近代日本基督教と朝鮮』(明石書店、1998年)、岩井文男『海老名弾正』(日本基督教団出版局、1973年)、關岡一成『海老名弾正—その生涯と思想』(教文館、2015年)同『人になれ人、人になせ人—クリスチャン・サムライ海老名弾正』(教文館、2019年)、同『海老名弾正関係資料』(教文館、2019年)を参照のこと
- 15) 『熊本バンド研究』281頁。
- 16) 鶴沼裕子『日本キリスト教史』(聖学院大学出版会、1997年)、39頁。  
海老名の新神学形成に関しては、松岡八郎「吉野作造とキリスト教の影響④-」(『東洋法学』、37巻2号、1994年1月)を参照。
- 17) なお二人の神学論争の経緯と資料に関しては、『植村正久とその時代 第五巻』、243～438頁を参照。
- 18) 小崎弘道『70年の回顧』(大空社1992年)、334-335頁。実は、小崎弘道こそ新神学の高等批評を日本にいち早く紹介した人物であった。渡瀬常吉は『海老名弾正先生』において、「小崎弘道氏すら明治二十二年[1889年]同志社に於ける夏期学校にての講演「聖書のインスピレーションに就いて」が物議の種子となり、また同氏が米国シカゴに於ける世界宗教問題に読まれたる「日本に於ける基督教」なる論文が、宣教師の間で物議になった」(228頁)と述べている。
- 19) 雨宮栄一『若き植村正久』(新教出版社、2007)、28-29頁。
- 20) 『回想の内村鑑三』(鈴木俊郎編、岩波書店、1969年)、224頁。なお同時代人からみた内村鑑三と植村正久との関係について、田村直臣『我が見たる植村正久と内村鑑三』(向山堂書店、1932年)を参照

- 21) 關岡一政編『海老名弾正関係資料』（教文館、2019年）、224頁。
- 22) 同書、227頁。
- 23) 同書、225頁。

「主要な参考文献」

- 1 『内村鑑三全集』（1、2、10、11、12、22、31巻）（岩波書店）
- 2 『内村鑑三日記書簡集』（2、4巻）（オンデマンド版、2005年）
- 3 『六合雑誌』（127号（1891.7）、130号（1891.10）、139号（1892.10）、153号（1893.9）、154号（1893.10）、158号（1894.2））なお『六合雑誌』からの引用は例えば127号3頁は、②⑦－3と表記した。
- 4 『新人』（2巻4、5、6号（1901.11、12、1902.1））なお『新人』からの引用は例えば2巻4号6頁は、②－4－6と表記した。
- 5 『植村正久著作集』（4巻）（新教出版社、1966年）
- 6 雨宮栄一『若き植村正久』（新教出版社、2007年）、『戦う植村正久』（同、2008年）『牧師植村正久』（同、2009年）
- 7 關岡一成『海老名弾正—その生涯と思想』（教文館、2015年）
- 8 同志社大学人文科学研究所編『熊本バンド研究』（みすず書房、1997年）



